

教えの庭から

今年も境内にある沙羅の木が、可憐な白い花を咲かせました。朝に咲いて、夕方には散る。そんなはかない一日花です。けれど、どの花も自分の順番が来ると、静かに、気負わず、見事に咲いて、そして散っていきます。私はその姿に、深いものを感じます。

沙羅の木は仏教における三大聖木と呼ばれる樹木の中の一つです。ちなみに、三大聖木は「無憂樹」この木の下で釈尊誕生する、「菩提樹」この木の下で釈尊悟りを開く、「沙羅の木」この木の下で釈尊入滅する、の三つの樹木です。沙羅の木が沙羅双樹と呼ばれるようになった始まりは、お釈迦様が旅の途中で最期を迎えるときに選び、

沙羅の花に学ぶ

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

横たわった場所が2本の対になった沙羅の木の下だと教えを私たちに伝えてくれられていきます。日本では夏椿を沙羅の木と呼んできます。

「平家物語」の冒頭には、

迎えるという、諸行無常の沙羅の花は、春に柔らかな新芽を芽吹かせます。木には多くの花芽があ



挿絵 平尾恵郷

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花色、盛者必滅の理をいて、夕方には散ってゆきあらはす」とあり、沙羅の白い花の色は、どれほど盛んなものもやがて終わりをあふれてきます。

沙羅双樹の花の色である「白」は、日本で浄化の色として使われてきています。葬儀での白装束は、故人が穢れのない状態で安らかにあの世へ旅立てるようという願いから用いられています。「白」は仏様が住む浄土にふさわしい色とされます。今、驕っている者もその隆盛の時期は長く存在なのです。ここでは沙羅の花が、色とともに、一日花としてのほかなさも象徴していると考えられます。

けれど、花が咲くということ自体が、いのちの奇跡でもあります。芽を出し、つぼみをふくらませ、花を咲かせ、そして散っていく。そのひとつひとつが、太陽の光や雨や土のめぐみに支えられているのです。いのちあるものを見つめれば、すべて太陽のめぐみにより、地球上で、生きていくというより、生かされているという思いを巡らすと、138億年前の宇宙誕生以来の営々たる営為が込められていて、それは、留まることなく展開し続けています。生命系全体も太陽系も天の川銀河も宇宙の部分でありながら、実に多様な私たちを現しながら、動き続けています。すべては、諸行無常です。宇宙の悠久の流れの中で、この身をもって今ここにあり。それは、ほかなくも、かけがえないことがあります。

白い沙羅の花が静かに教えてくれるのは、「太陽からのいのちの恵み」で花が咲き、やがて散ってゆくという「この世の無常」ということです。すべてのいのちは恵みによって生かされています。